

ナカニワ式ミュージアム～ウィーン大学地球科学教室

延原尊美



子どもたちの校外学習の場としても活躍

ウィーン大学は2015年に創立650周年を迎えたドイツ語圏最古の大学である。特別研修の機会を得て、ウィーン大学地球科学教室に2015年4月から2ヶ月ほどお世話になった。地球科学教室のある新キャンパスは個性豊かな現代的な建築群からなっている。地球科学教室の建物は、中央に中庭のような吹き抜けスペースがあり、それを挟んで両側にたくさんの研究室が並ぶ4階建ての構造になっている。"中庭"に面した研究室の前には、バルコニー的な回廊が巡らされており、また中央の吹き抜け構造を渡る橋が両側の回廊をバイパスしている。あたかも、白亜のマンションのような作りになっており、とても洗練された印象である。そして、この吹き抜け構造の中庭とそれに面した1階の壁には、大学の研究成果やその試料、教育に利用できる標本群が効果的に展示されている。隕石、岩石、鉱物、土壌断面剥ぎ取り、結晶模型、造礁サンゴ骨格、化石の大量に含まれる石材、巢穴化石、哺乳類や恐竜類の全身骨格、中生代型の植物など、標本の質と多様さは自然史博物館のエッセンスが凝縮されたようである。

ラベルは小さく、あまりくどくどとした説明はない。むしろ、美しさや形のおもしろさを際立たせる雰囲気大切にしていると感じられる。ステゴザウルスの全身骨格の上空には、翼竜の骨格が吊るされ、中生代の面影を残した植物を隣接させるなど、ナカニワ式の空間をうまく利用した立体展示が世界を作り出しており、建築物と調和したアートのようなようでもある。地学分野に詳しくない一般市民が入ってきて、無意識のうちに興味をいだかせるような場となっ



ステゴザウルスを上から見ると意外にスリム

ている。実際に、校外学習の一環なのか、子供たちをつれて見学にきているグループを目にすることもあった。大学の中の通路なのでももちろん無料で公開されており、市民と大学の研究をつなぐ場としてもうまく機能しているようだ。

展示物を回廊で取り囲むこのような空間展示では、大型の骨格標本をあらゆる方向から観察できるという利点もある。下から見上げた翼竜の骨格を、目線の高さで観察し直して翼が一本の指の骨でできていることに気づいたり、地上で見上げていたステゴザウルスを、回廊から見下ろして意外にスリムな体つきであることを発見したり、「ナカニワ式」ならではの「気づきのおもしろさ」がある。

また、これらの標本群はもちろん大学の授業でも大いに活用されていて、ときどき「ナカニワ」に20~30名程度の大学生が集まって、ワークシート片手に標本観察の課題をこなしている姿を目にすることもあった。天候に関わりなく、教室の目と鼻の先で、実物の標本を効果的に利用した教育ができる環境は羨ましい限りである。普段見慣れていた展示を見る目がまた変わっていく・・・学生たちは、そんな体験をしているのではないだろうか？ 日本の大学も博物館も「ナカニワ式」に学ぶべきことは多いと感じた2ヶ月であった。